

谷口有三社長が語る「社会との調和」とは？ 地域活動として防災訓練への参加 救命技能認定の取得推進 声かけサポート運動の推進 時差ビズの導入などを展開



特殊詐欺根絶に対する感謝状



「社会との調和」を語る谷口社長

有功社シトー貿易(株) (谷口有三社長、本社=東京・北区) の谷口有三社長(チーフディレクター) は、専門商社として全国1200社の印刷・紙器・段ボール箱製造現場および関連産業向けに専門的な「生産技術」、「製品」と「情報」を届けている。

同社が事業展開するうえでのビジョンとしてあげているのは、一つが「美しい箱作りのお手伝い」であり、「より高品質な箱になるための最新技術の提供」ともう一つは「明日はもっと楽しい。つまり製造現場の皆さんの作業環境がより快適」となる提案だ。

これらは同社のビジネス展開にも直接的に関係する基本方針だが、さらに「社会との調和」にも焦点をあてた事業ビジョンを明確に打ち出している。「働き方改革」が叫ばれるなか、企業と社会とのつながり方を明確にしていくことで、「社会に信頼される企業づくり」を目指している。

具体的には、「積極的に地域活動および環境・ボランティア活動に取り組むことで、地域・社会に貢献していく」というテーマをかかげ、躍進をつづけている。大手企業ではなく中小企業としてこのようなビジョンを描き、実行している会社が少ないなかで、同社のこうした事業展開は注目に値する。

谷口社長に「社会との調和」として、どのようなかたちで実行しているのか、その意義は何かなどをインタビューした。

社会貢献は地味だが、意義深い活動

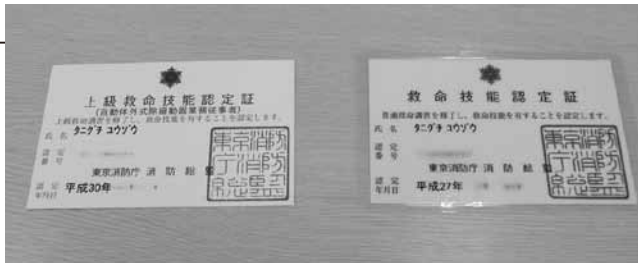
—— 貴社は会社の基本方針を明確化して、ビジョンに向けて果敢にチャレンジしていらっしやいます。 「社会との調和」についても明文化されています。具体的にはどのようなものでしょうか。

谷口 当社は事業展開するうえでの基本方針として、①社員重視、②お客様指向、③独自能力、④社会との調和の4つを掲げています。「社会との調和」をあげたのは最近ですが、社内ではかなり以前から取り組んでいました。社会貢献は地味な活動

であり、直接的にビジネスに結びつくものではないので、あまり外に向けて発信はしてきませんでした。しかし、社会的に見て、会社の立ち位置を明確にして、社会との調和を目指すことで、社員全員がそうした感性を身につけていくことが大事ではないかと考えています。

—— 具体的な地域活動として防災訓練を挙げていますが、実際にはどのようなものですか。

谷口 まずあげられるのが、防災訓練への参加です。春、秋の年2回おこない、たとえば近くの飛鳥山(東京・北区)で炊き出しの訓練に参加したり、当社内に備蓄している非常食を試食したりして、突然の災害にも



救命技能認定証

冷静に行動できるようにしています。また都内には防災訓練センター（豊島区池袋、墨田区本所、立川市ほか）があり、そこを訪問して、消火栓の使い方、火災や煙への対応など具体的な「行動」を訓練しています。とくに地震については、シミュレーション車で、揺れを体験し、パニックにならない訓練をしています。

——貴社ではチーム編成もおこなっていますか。

谷口 従業員数が50名以下の企業は、チーム編成は不要ですが、当社では必要性を感じて、全員でチームを組んでいます。「減災対策本部」という名称で、リーダーは私、副リーダーが2名おり、実際の指揮は副リーダーがおこないます。この下にAチーム「救出・救護班」5人、Bチーム「消化・安全点検班」4人、Cチーム「情報・衛生班」5人、Dチーム「避難誘導・生活班」4人という構成です。

具体的には、Aチームは、救出活動や防災関係機関への協力などにあわせ、救護活動や傷病者の搬送。Bチームは、被災後の地域の巡回、危険物・危険箇所への広報活動のほか、出火防止・火災の警戒、初期消火活動な

ど。Cチームは、情報の収集・伝達、記録、デマの防止・監視、防災関係機関への協力、衛生対策の広報、防疫対策への協力など。Dチームは、避難の呼びかけや安全な避難誘導、炊き出し、給水、避難生活への協力、生活相談などをおこないます。また、2年に1度、メンバー編成をおこないます。

——減災対策として関連がある「救命活動」についてはいかがですか。

谷口 減災対策ならびに社会貢献の一環として、「救える命を私たちの手で」を目指して、2015年以降、「救命技能認定」取得を推進しています。全従業員が普通救命講習を受講し、うち私を含めた2名が、上級救命講習を受講して資格を取得しています。「救命技能認定証」は消防署が発行するもので、普通救命講習は半日の講習を受講、上級はこれに加え試験もあります。当社では全員が、認定カードを常時身につけています。

ボランティア活動となりまので、出勤途中であっても、駅で気分が悪くなっている人を見かけたら、駆け寄ってフォロウしたり、事故などに遭遇した現場を通りかかった場合など、救

急車が来るまでの間にできる範囲でフォロウするよう訓練をしています。ときには止血したり、脈をはかったり、AED（自動体外式除細動器）も全員が使えるようにしています。地元消防署に依頼して、OBの方を当社に派遣していただき、レクチャーを受けることも実施しています。

——東京商工会議所が主催する「声かけ・サポート運動」にも賛同していると聞いていますが、これも地域・社会貢献の一環でしょうか。

谷口 減災対策とも関係があるのですが、街や駅で困った人を見かけたら「声をかける」ことを実行しています。さらに緊急時には、講習で培った技術を活かし、応急手当や救命などをおこないます。また当社には仕事柄、英語を話せる従業員もいるので、外国人が困っていると、サポーターしています。

——東京都が「働き方改革」の一環として提唱している時差ビズについてはいかがですか。

谷口 大都市における通勤ラッシュ時の混雑は、社会問題化していますが、東京都は混雑緩和策として打ち出しているのが「時差ビズ」です。当社では

遠隔地から通勤する従業員もあり、2018年度から3種類の出社パターンを採用して実行しています。具体的にはこれまで9時出社・5時半退社であったのを8時半・9時・9時半の3つを設定、実行しています。

当社の場合、フレックスタイム制ではなく、各自3パターンのなかから選んでもらっていますが、一番遠い人は片道2時間かかる人もいるため、効果は出ています。さらに当社では定期代の月額に上限を設けていることから、会社の近くに引越してももらえる場合、短距離通勤手当を支給することになっています。

——これ以外に、「社会との調和」として、どのような施策を実行していますか。

谷口 社会福祉作業所との連携として、障害者の方に内職作業を依頼しています。

また環境・ボランティア活動として、オフィスの使用済み・不要な古紙のリサイクルや、ペットボトルのキャップを集めて、発展途上国へのワケチン寄付に役立てたり、使用済み切手を財団に寄付。また、特殊詐欺根絶のための周知活動もおこなっています。

——ありがとうございました。